

## 今なぜ多様な外国語教育が必要なのか？

理事 臼山 利信

時代と社会の変化の速度が情報伝達のそれに比例するとすれば、おそらく現代の日本は未曾有の最速段階に入っていると言えるかもしれない。携帯や iPhone などに代表される無線通信機器によって、限定的な情報とは言え、国内外の主要なニュース報道から自身と繋がりを持つ人々が発信する個人的な情報まで瞬時に手に入る世の中だ。

情報過多の波に晒され続けた結果、国も社会も組織も個人も必要以上に情報に振り回され、疲弊している感がある。ただ生き残るために生きるといったような、ある意味で無目的な価値観が世界中に蔓延しているように感じられる。しかし、人間が真に社会的存在であり、その関係性の中で生きる実存者であるならば、人間は世界や他者と折り合いをつけてより良く生きることを本質的に志向する存在ではないかと私は信じている。もしもそうであるならば、関係性から必然的に生じる利害の衝突や人間同士の摩擦は、人間だからこそ可能である高度な相互調整能力と叡智の対話行動によって最終的には解決できなければならない。

世界は非常に複雑だ。複雑で多様性に満ち溢れている。しかもすべてが変化している。絶え間ない変化の連続だ。その世界に住む人々の価値観も生き方も多種多様である。はっきりしているのは、どこで暮らしていても好むと好まざるとに関わらず誰もが世界の複雑性や多様性と直接・間接に関係しながら生きているということである。少なくとも日本人々は、世界と直に交流が可能な開かれた社会システムの中で生きている。

今日本は、加速度を一段と増す少子高齢化、それに伴う経済規模の漸次的縮小など、社会基盤の弱体化が顕著になる一方、恒久的に安定した社会づくりのための有効な手立てがなかなか講じられない、苦しい見通しの情勢が続いている。こうした中で、私たちは、国外の世界や人々との関わりを完全に遮断し、それを避けて日本社会という枠組みの中だけに留まることはもはやできない。

アメリカの凋落傾向、中国とインドの超大国化、イスラム世界の拡大などの動きはまさに世界秩序のシステムに大きな変化が生じていることを意味している。現在、顕著に超大国化しつつある中国をそのシステムの中に如何にして平和的に組み込んでいくかが、国際関係における焦眉の課題となっている。中国との良好な関係は、日本を持続可能な安定した社会に育て上げていくための前提条件であり、戦争放棄と平和主義

を謳う憲法を持つ日本の安全保障に直結した死活問題でもある。

まさしく日本社会は、世界を見つめ、世界と向き合い、世界と関わっていくことが日常化した時代に入っている。外国語は、その世界に直接アクセスし、世界の人々と双方向の交流ができる、利便性の最も高い一番大切な手段である。外国語というのは、むしろ英語だけではない。世界に存在する6千とも8千とも言われる言語一つ一つのことである。

日本の外国語教育の主な目的は、他の教科教育とともに、子供たちの、多様性と他者を尊重する豊かな人格形成と、良識ある有為な社会人としての自己実現を後押しすることにある。真のグローバル人材は、同時に優れたローカル人材でもある。国家間であれ、地域社会であれ、様々な組織の内部であれ、複雑で深刻な利害の衝突や対立に怯まず、決して屈することなくどこまでもベストを尽くす叡智の交渉力と粘り強い行動によって自他ともの共存共栄を目指すことのできる者であり、寛容の心を持ち、人間や文化の多様性を極限まで尊重できる者である。

多様な外国語学習は、当該の外国語を通じて自身の母語と母文化の価値を再発見・再認識する作業であり、自分らしく生きるための自尊感情を育む大切な内発的学習行為である。それは、同時に他者の母語と母文化の価値をも理解し、他者一人一人の自尊感情の大切さに気づく学習行為でもある。また最終的には、他者の言語、文化、社会、国に対する温かい敬意の念を育む、人間存在が本源的に有する知的営為なのである。

\* \* \*

発足した日本外国語教育推進機構の理事の一人として、日本の学校教育における多様な外国語教育の普及・振興のために微力ながら精一杯尽力する所存である。

(筑波大学)